

Center News

Center for Cooperative Research and Development on School Education
Faculty of Education, Gunma University

第 8 号

(2020年3月31日発行)



「学び合う仲間によるリレー講座」

目次

- 2 ● 巻頭言：教育実践力を身につけた学校教員の育成と学び続ける教師の支援を目指して
- 3 ● 寄稿：着任にあたって
- 4 ● 寄稿：着任にあたって—これからの教育を担う「金の卵」を育むために—
- 5 ● 寄稿：「群馬大学教育実践研究 第37号」発行に際して
- 6 ● 報告：附属幼稚園・附属小学校から
- 7 ● 報告：附属中学校・附属特別支援学校から
- 8 ● 報告：今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的なFD活動の推進
- 9 ● 報告：子ども総合サポートセンター事業概要
- 10 ● 報告：附属小学校における取組 ～ 提案授業・授業研究会 ～
- 11 ● 報告：現職教員の成長を促す温かな学び合いの場
- 12 ● 報告：教育臨床事例検討会 2019年度の取り組み
- 13 ● 報告：体験的科目におけるボランティア養成セミナーへの参加
- 14 ● 報告：群馬県立自然史博物館と筑波大学との協働
- 15 ● 報告：「群馬大学教育実践研究37号」発行のお知らせ
- 16 ● 報告：資料室利用状況

● 巻頭言

教育実践力を身につけた学校教員の育成と 学び続ける教師の支援を目指して

附属学校教育臨床総合センター長 日置英彰

本学教育学部では、学部の授業と教育現場での実践の有機的な結合に努力しており、大学1年次から4年次まで一貫した「学部・学校現場往還型カリキュラム」を構築、実施しています。このカリキュラムは特色あるカリキュラムとして全国で注目を浴びています。附属学校教育臨床総合センターでは教育実習を行ったすべての学生に対して毎年アンケート調査を行い、結果を分析しています。3年次の教育実習に行く前に、「教員になりたいと強く思う」と答えた学生は全体の3割にも満たないのですが、実習を終えると約6割と2倍以上に増加します。また、授業づくりはもとより、学習評価、児童生徒との関わり合いなどにおいて自分なりの課題も発見して実習から帰ってきます。このように教育実習の経験が学生の意識に大きな変化が現れるのは、学校現場において質の高い多くの体験的な学びの場が学生に提供されているからであります。長時間労働が問題となり、働き方改革が求められる中、群馬県教育委員会、市町村教育委員会ならびに実習に協力してくださる数多くの学校のご理解とご協力の賜物であります。

本センターの主な使命は、上述の「教育実践力を身につけた学校教員の育成」と、もう一つは「学び続ける教師の支援」です。私たちの社会はグローバル化の進展やAI（人工知能）・ロボットなどの技術革新によって社会構造が急速に変化しています。こうした時代を生きる子どもたちのために明治維新以来といわれる教育改革が進んでいます。探究的な学習活動の推進、プログラミング教育の必修化、道徳の教科化、英語教育の改革、大学入試改革など枚挙にいとまがありません。本センターではそうした改革に対応すべく、教員研修リレー講座、長期研修院制度、紀要、年報等の発行、教育臨床事例検討会など、さまざまな取り組みを通して「学び続ける教師の支援」を行っております。本年度着任した本センターの久保信行客員教授による道徳ブログの配信も始めました。また、本センターが主催、共催する研究会、事例検討会、リレー講座等の案内、道徳ブログの更新、研究紀要、報告書等の掲載の案内など情報をタイムリーに配信するメールマガジンの発行も開始しました。本センターのホームページよりご登録いただけます。

本センターは、来年度から「附属教育実践センター」と改称し、さらに部門も改変して新しいスタートを切ります。地域と群馬大学教育学部を結ぶ役割を一層効果的に担えるよう努力して参りますので今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

● 寄稿

着任にあたって

附属学校教育臨床総合センター客員教授 久保 信行

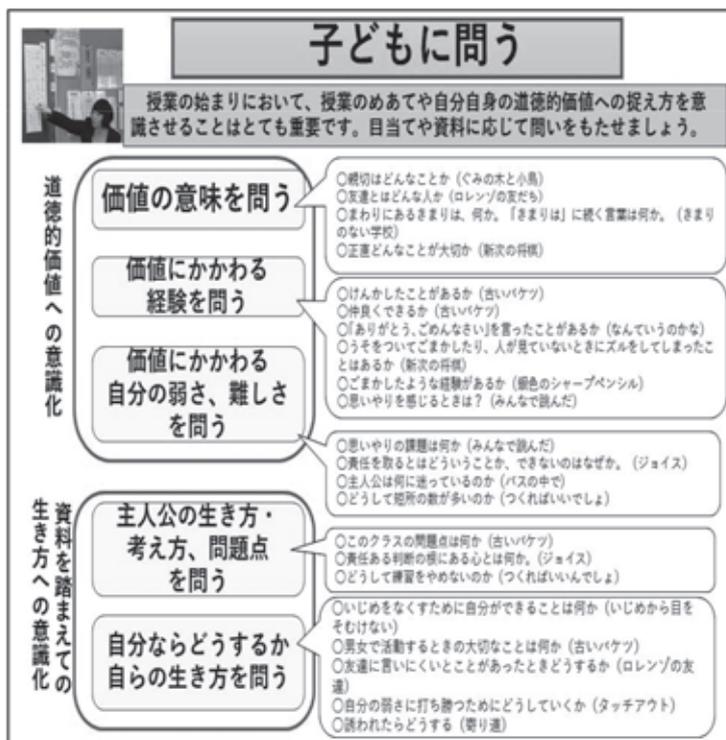
1 はじめに

この度、群馬大学教育学部・附属学校教育臨床総合センターに着任しました。このセンターは地域や学校現場に密接にかかわって実践的に貢献する先導的組織です。学校での経験を生かしてこのセンターで活動していきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

2 自己紹介

私は、群馬大学教育学部卒業後、小・中学校の教諭として16年、学校の管理職として7年、教育委員会14年の計37年間、義務教育にかかわりました。退職後は、前橋市の中学校区の地域寺子屋のコーディネーターをして地域と中学校を結びつける仕事をしていました。専門教科は理科ですが、群馬県総合教育センターでは道徳の担当の指導主事をしていました。その関係から、県内の各小・中学校から教科化に伴い「道徳科の指導の在り方」について講義や演習、授業の指導助言を依頼されることが多くなりました。「考え、議論する道徳」を目指し、先生方が真剣に取り組む姿を目の当たりし、日々刺激を受けて道徳教育について学びを深めていました。そのような中、平成29年度～令和元年度の3年間、道徳教育総合支援事業（文部科学省・群馬県教育委員会委託）で邑楽町の小学校4校・中学校2校で道徳の授業づくりにかかわらせていただきました。各学校の道徳教育推進教師の方々と交流する中で授業づくりでたくさんのことを学びました。その学びを整理すると以下の10点になります。

- ① 「よりよい道徳授業をつくりたい」という思いが出発点であること。
- ② 徹底した教材分析から、このことを子どもとともに考えたいという箇所が明確になること。
- ③ 何をねらい、どこまで考えさせるか指導者がはっきりさせること。
- ④ 核となる活動を決め、十分に時間をかけて話し合うこと。
- ⑤ 自分の考え方・生き方を意識できるよう「問う発問」をすること。(右図)
- ⑥ 子供の話し合いを踏まえ、さらに考えが深まるよう教師が揺さぶること。
- ⑦ 終末に、子供の学びを整理まとめること。
- ⑧ 子供の学びを応援する教師の一言を加えること。
- ⑨ 子供の深まった学びを家庭や地域に広げること。
- ⑩ 一年間を通して道徳授業への子供の思いをもとに自分の授業の在り方を振り返らせること。



以上、邑楽町の小・中学校の道徳授業からの学びのほんの一例ですが、これからも道徳授業への先生方の応援を積極的にやっていきたいと考えていますので、気軽にお声をかけていただければと考えています。

なお、当センターのWEBページに道徳ブログを掲載しています。毎週更新していますのでご覧いただければ幸いです。

● 寄稿

着任にあたって

—これからの教育を担う「金の卵」を育むために—

学校教育臨床総合センター 教授 安藤 哲也

2019年度より、群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センターに着任致しました、安藤哲也です。どうぞよろしくお願い致します。当センターは、学校現場の実践知と大学の理論知とを有機的に結び付けた、現職教員への支援と学生への指導を目的としています。職能開発と教員養成を同時に推進する重責を担う部署ですので、身が引き締まる思いが致します。

私自身も群馬大学を卒業し、25年間にわたり群馬県の教員として勤務してきました。その間、特別支援学校（聾、知的障害）、幼稚園、小学校、中学校と、様々な校種で担任をし、様々な発達段階の子どもたちと共に教員としての学びを積み重ねてきました。例えば、特別支援学校では、何より一人一人の子どもの思いに寄り添うことを、幼稚園では、一人一人の思いを引き出し、発揮させることができるような環境をつくりだすことを、小学校では、子ども同士で学び合う関係をつくり、支えていくことを、中学校では、学年でチームとなって様々な場面での子どもの姿を見取り、それぞれの立場や人間性で接していくことを、印象深く学んできました。

特に、附属幼稚園と教育実習特別協力校の前橋市立荒牧小学校、桃川小学校では、教育実習主任を務め、通算で10年にわたり教育実習運営に携わりました。その間、「授業の構想を指導案として記述することができない」、「指導案の通りに授業を展開することができない」と、悩み、涙する学生の姿に触れてきました。また、何とか教師としての満足感や達成感を味わわせようと、実習生と共に授業を考え、教材について試行錯誤し、空授業を演じる先生方の姿にも触れてきました。現場の先生方にとって、教育実習生の指導は、日頃の業務に追加される、いわば「おまけ」の仕事ですから、負担を感じて当然です。しかし、私が出会った先生方は「授業は下手でもいい。一生懸命子どもに向き合おうとしている姿を見ていると、自分も初心に返れる」「実習生の授業は、私の授業の鏡写し。自分の指導を客観的に見られる、とてもよい機会」と、とても前向きに受け止めてくれていました。

こうした様々な経験を通して実感しながら身に付けたあれこれや、現場の先生方とのつながりを当センターでの職務に生かしていければと考えています。

当センターの役割のうち、一方の柱である、現場の先生方の職能開発に資する業務としては、例えば、大学での理論知を直接的に先生方に還元する「教員研修リレー講座」や、理論知に加え、現場実践の積み重ねから得られた実践知を広く発信する『教育実践研究』、『教育実践年報』発行などの取組があります。これらの取組を通して、私自身は、学校現場と群馬大学とを結ぶ、「細くて弱々しいけれど、確かに存在する一本の糸」のような存在になりたいと考えています。

また、もう一方の柱である、教員養成に関する業務においては、前任者である黒羽正見先生の「一人一人をまなざす」姿を手本にしていきたいと考えています。黒羽先生は、たとえ受講者が100名を超える授業であっても一人一人の学生を大切に、寄り添う姿勢を崩されませんでした。そうした姿勢は「指導」によって身に付くものではなく、知らず知らずのうちに当たり前のもので「受け止められ」、「自然と」身に付いていくものです。私自身も、数々の学校現場で見聞きし、自分自身も実感した「よい指導」のあれこれを、自然と伝えられるように、「金の卵」たちを育てていきたいと考えています。

● 寄稿

「群馬大学教育実践研究 第37号」 発行に際して

紀要編集委員長 三 國 正 樹

今年度の学校教育臨床総合センター紀要「教育実践研究」が発行されることとなりました。ご投稿いただいた方々に心より御礼を申し上げます。そして、今年度の編集委員長として仕事を経験するなかで、この論文集の歴史の重みを感じております。

本センター紀要の第1号は1984年3月に刊行され、掲載された論文は5本でした。その後、掲載論文数は年を重ねるごとに増え、第21号からはカラー刷りも採用となり、第26号からは図書館のリポジトリ・システムを利用した電子ジャーナルとして多くの方々にご覧いただけるようになりました。査読の方法についても綿密に行うようになり、学術論文集としての充実を図ってまいりました。そして今回は36本の論文が掲載されることとなりました。

執筆者は本学部教員、大学院生、附属学校園、ほか県内各学校の現職教員の皆さんなどで、のべ104人に及んでおります。この1年間に取り組まれてきた各校種、各教科の教育実践の報告、そしてそれぞれの観点からの意義や課題が述べられており、その多くが充実した共同研究であることに感謝の念を表したいと思います。

多種・多様な教員たちが互いに協力して研究を行い、よりよい授業の構築を考えていく必要がある現代において、「学校現場で求められる教育課題」への大学の対応は重要であり、「群馬大学と群馬県教育委員会によるシンポジウム“ぐんまの教師力を高める2019”」など、さまざまなプロジェクトが行われてきました。大学の役割がいろいろと問われる現在、センター紀要「教育実践研究」は大きな意味を持つと考えます。より一層充実した教育実践を考えるために、また新しい教育を考えるために、専門領域はもちろん、さまざまな教科の研究から問題解決の示唆を得ることは重要になってくることと考えます。

この数年間で、大学の在り方は大きく変化してきました。これまでも全国的に、独立行政法人化、種々の再編・統合等が行われてきましたが、大きな改革として掲げられていた「群馬大学と宇都宮大学の“共同教育学部”」は2019年8月に大学設置・学校法人審議会の審議を経て設置されることが決まり、新しい教育学部が4月より実現します。共同教育学部は、「幅広く深い教育内容の授業の実施」、「双方向遠隔メディアシステムで相手大学の得意分野の授業を受講」「両大学の教員が共同で設計・実施する高い専門性の授業」「学生同士の交流を通してのコミュニケーション能力の向上」などが期待されており、今後の大学がどうあるべきか、という方向性を示す責任の一端を担っていると言えるでしょう。

昨今はICT（情報通信技術）の活用などが議論されるなど、情報化時代の中での教育の役割も多様化していると思います。「高度化・複雑化する諸課題への対応」「学び続ける教員像の確立」が求められる中、本センター紀要を多くの教育関係者に読んでいただければ、それに勝る喜びはありません。

本紀要の一層の充実のために、皆様からのご意見等をいただければ幸いに存じます。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

● 報 告

附属幼稚園から

附属幼稚園 赤尾 香子

附属幼稚園では、「幼児の遊びを豊かにする園庭」を主題に掲げ、3年間研究を進めてきました。1年次の「季節の移ろいとともに変化する遊びに目を向けて」と2年次の「遊びたい！を引き出す園庭」に引き続き、3年次となる本年度は、副主題を「新しい自然環境の中で幼児はどう遊ぶのか」と設定しました。

本園は、平成30年12月に新園舎・新園庭が完成し、新しい自然環境に関わりながら遊ぶ幼児の姿が見られるようになりました。そこで本年度は、幼児一人一人が新園庭の自然を中心とした環境に関わっている場面に着目した実践事例をもち寄り、それを基に保育カンファレンスを行い、そこから園庭の環境の構成や教師の役割を考察しました。

成果として、多面的な「自然環境がもつよさ」との関わりが見え、幼児が新しい園庭においても自然環境と関わる中で、多くのことを経験していることが示されました。3年間、園庭についての研究を行ったことで、園庭の環境を構成するために、「園庭を四季から捉えること」「発達により自然環境との関わり方が異なることを意識すること」という2つの視点を教師がもつことの重要性を確認することができました。

また、公開研究会では、多くの参加者に新園舎・新園庭で遊ぶ幼児の姿を見ていただき、研究の成果を発表することができました。

今後も、園庭の中で自然環境がもつよさを季節ごとに捉え、幼児の発達に応じて関わり方が違うことを考慮しながら、幼児一人一人が自然環境に目が向くようにし、そこから得られる楽しさを十分味わうようにしていきたいと考えています。

附属小学校から

附属小学校 谷田部 喜博

附属小学校では、「未来を拓く子どもの育成」を研究主題に掲げています。4年次となる本年度は、副主題を「『見方・考え方』を働かせて協働的に学ぶ学習指導の在り方」と設定し、各教科等の資質・能力の育成に向け、「主体的・対話的で深い学び」の視点から各教科等の問題解決的な学習を再考し、授業研究を行いました。学部の先生方のご協力や、県教育委員会の方々のご指導をいただきながら、各教科等部による提案授業（計11回）及び部内授業（計17回）を通して、研究の検証と再考を繰り返してきました。研究の成果については、令和2年度の公開研究会（6月12日・13日）で発表いたします。

令和2年度から本格実施となるプログラミング教育については、本年度、校内の全学年で授業実践を行いました。1月には県教育委員会主催の「小学校プログラミング教育に関する研修会」の会場校として4授業を公開しました。現在、これまでの研究成果や9つの授業実践を冊子にまとめています。

また、本年度も県内教育関係者を対象に「夏季教育講演会」を開催し、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりや評価の在り方について、東京大学の白水始先生にご講演いただきました。参会者一同、今後の教育の方向性を見据える充実した機会となりました。

今後も、本校の研究や教育活動の成果を地域に広めたり、共に学ぶ機会を設けたりするなど、群馬県の教育の向上を目指し、より実践的な研究や取組等を進めていきたいと考えています。



〈提案・部内授業の様子(生活科)〉



〈プログラミング教育授業(算数科)〉

● 報 告

附属中学校から

附属中学校 木 村 謙太郎

本校では、平成30年度より研究主題を「自ら問題を解決し、未来を創る生徒の育成」、副主題を「『見方・考え方』を働かせる問題解決の過程を通して」とし、これからの予測困難な時代において、自らの力で社会や自分自身の問題を解決できる生徒の育成を目指し、研究を進めてきました。今年度は、その2年目として、昨年度までの成果と課題を基に、「はばたく群馬の指導プランII」にもあるような「主体的・対話的で深い学び」にするための授業改善に向けて、「思考力、判断力、表現力等」のさらなる育成に重点をおき、特に「深い学び」の実現を目指して実践研究に取り組んできました。

成果として、各教科等において問題解決の過程の関係を成立させたり、「思考力、判断力、表現力等」育成のための手だてを講じたりすることにより、自らの思いや考えを適切に表現しようとする生徒の姿や、身に付けた知識を比較したり関連付けたりしながら整理して活用の幅を広げていく生徒の姿が見られ、各教科等で「思考力、判断力、表現力等」の育成を図ることができました。

10月に開催した公開研究会では、各教科等の公開授業とともに、文部科学省初等中等教育局視学官の藤枝秀樹先生・直山木綿子先生、教科調査官の浅見哲也先生、国立教育政策研究所学力調査官の後藤文博先生をお招きし、新しい学習指導要領の実施に向けて、「なぜ、今、探究なのか」「外国語教育における小中高連携について」「道徳科の授業づくりについて」「なぜ群馬県の中学生の学力は高いのか」等について、ご講演をいただきました。県内外より、600名に迫る多くの参加者にお越しいただき、たくさんのご意見をいただくことができました。

来年度は、本研究の最終年次として、令和3年度の新しい学習指導要領の全面実施に向け、今年度の課題や反省を基に計画的・継続的に研究を重ねていきます。今後も、県内中学校のモデルとなるべく、さらなる授業改善を推進していきたいと思っております。

附属特別支援学校から

附属特別支援学校 堀 込 直 道

本校は、今年度より「学びを生かし、自分らしく社会とかかわる児童生徒の育成」を研究主題とし、児童生徒一人一人が学びを積み重ねながら、育成を目指す資質・能力を確実に身につけ、児童生徒を取り巻く環境や社会に自らの力でかかわることができるようにすることを目指し取り組んでいます。今年度は「新学習指導要領に対応した各教科の実態把握を活用した授業づくり」を副主題として設定しました。具体的には、新学習指導要領に対応した各教科の実態調査表を作成し、実態調査表をもとに観点別に子どもの実態を捉えることで、一人一人の学びに合わせた目標を設定し、学習活動や指導計画、支援の方法に生かせるように授業実践に取り組んできました。

11月に開催した公開研究会では、国語科、算数・数学科、保健体育科、音楽科、図工・美術科といった教科の授業を計9つ公開し、小学部の算数科と、中学部の保健体育科、高等部の国語科の3つの授業について、授業研究会を行い、授業中に見られた子どもの姿から授業改善や授業づくりについて参会された先生方と意見交換を行いました。また、群馬大学等の研究協力者の先生方からはそれぞれのご専門の立場から、子どもの実態把握についてご指導やご意見をいただきました。講演会では、国立特別支援教育総合研究所より、坂本征之先生をお招きし、これからの教育課程の在り方についてご講演をいただきました。

本実践をとおして、以下の3つの成果を確かめることができました。

- ・現在は一部の教科のみとなっていますが、新学習指導要領に対応した実態調査表を作成することができました。
- ・個別の指導計画や単元計画を立案する際に、実態調査表を活用したことで、根拠をもって目標や内容の設定をすることができました。
- ・一人一人の実態を観点別に捉えたことで、児童生徒一人一人の指導の重点や具体的な支援の方法を考え、関連する学習活動を単元の指導計画上に位置づけることができるようになってきました。

今後は、学習の結果、何ができるようになったのかを確かに評価し、子どもの学びを次の授業につなげることで、子どもが学びを積み重ねることができるようにすることを目指したいと考えています。

● 報 告

今日的要請に対応する学部・附属学校園連携による実践的なFD活動の推進

教員養成FDセンター長 吉田浩之

2006年7月の中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」の中では、「教職課程が専門職業人たる教員養成を目的とするという認識が大学教員の間に共有されていない、教員の研究領域の専門性に偏した授業が多い、学校現場が抱える課題に必ずしも十分に対応していない」等の問題が指摘されました。また、国立大学法人の第1期中期目標期間終了を踏まえ、2009年6月5日の文部科学大臣が決定した「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しについて」では、「附属学校園は学部・研究科等における教育に関する研究に組織的に協力すること」が強く勧告されています。このような背景を受け、本学教育学部では、当時の運営委員会が、教育学部教員の実践的指導力をさらに向上させるべく教育学部教員に適したFDプログラムを組織的に実行できるセンターの開設に努力し、2011年4月から「教員養成FDセンター（以下、「FDセンター」）がスタートしました。

その後も大学教育改革、特に教員養成学部についての提言が次々と出されています。例えば、2013年5月の教育再生実行会議「これからの大学教育等の在り方について（第三次提言）」では、「初等中等教育を担う教員の質の向上のため、教員養成大学・学部については、量的整備から質的充実への転換を図る観点から、各大学の実態を踏まえつつ、学校現場での指導経験のある大学教員の採用増、実践型のカリキュラムへの転換、組織編成の抜本的な見直し・強化を強力に推進する。学生の学校現場でのボランティア活動を推進する等、大学と学校現場との連携を強化する。文部科学省は今後行われる小学校教員免許の改訂や大学院の教職大学院化に伴い、附属学校園との連携による積極的な研修を通じた教育実践的な教員を強く求める。」等が提言されました。

さらに、2017年8月の国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議「教員需要の減少期における教員養成・研修機能の強化に向けて」の報告書では、「大学教員についての対応策」の中で早急に対応すべきこととして、「国立教員養成大学・学部において、研究者教員が一定期間、学校現場での教育実践研究の経験を積むことや、学校現場との共同研究を実施すること等について、時期や比率等に関する目標値を設定し達成状況をチェックすること等、教員養成分野の大学教員として必要な資質・能力を向上できる仕組みを整備することにより、実際の学校現場における教育活動と教育学を融合できる大学教員を確実に増やすこと。」が示されています。

また、群馬大学中期計画（第三期）の「教育学部のアクションプラン」でも、FDセンターに関する計画として「FDセンターを活用して、研究者教員が学校現場での指導を経験するためのFDについて検討する。（2016年度）」ことが明記され、2018年度には「FDセンターを活用して、研究者教員が学校現場での指導を経験するためのFDについて実施する。」とされています。このような提言等からは、教員養成分野の大学教員として学校現場における教育活動と教育学を融合できる資質・能力及び実践力の向上に資する大学と附属学校園の連携による積極的な研修の実施が求められていることがうかがえます。

一方で、上記で求められているような研修に該当する機会は、学部・附属学校園が連携する活動の中に、すでに少なからずみられます。たとえば、附属学校園の公開研究会や教育実習、学部教員による附属学校の児童生徒への授業や教員への校内研修等です。そこで、それらにFDの視点で大学教員が参加し、自らの教育内容・方法や教育実践に資する学びや気づき等を記録・報告する仕組みをつくることで、実践的なFDの機会になるよう、事業計画を構想し、2017年度から実施し3年目となります。

本年度は、そのようなFD活動を推進し、結果としてFD参加の報告書数は、86件となりました。今後は、本年度の取組の一層の推進と充実を図り、学部教員が附属学校園を日常的に訪問することや附属学校園で授業することが当たり前の光景になることに、より貢献していきたいと考えています。

● 報 告

子ども総合サポートセンター 事業概要

子ども総合サポートセンター長 懸 川 武 史

1 研究「UDL: 学びのユニバーサルデザインに基づく授業研究の在り方」

CASTによるUDLの理念(子ども一人一人の学びを保障する)に基づき、授業実践を通し研究を推進する。UDLガイドライン(CAST 2018)をもとに、授業デザインを行い、附属小学校第1学年算数科、附属小学校第6学年と附属特別支援学校小学部6学年による交流及び共同学習の図画工作科の授業を12月12日に公開した。

- ※ 公開研究会では、県内外より30名が参加した。
- ※ 県研究所連盟冬季研修会で成果を発表した。

2 「電話相談」、「来所相談」 ※令和元年度支援ケース数 電話9名 来所4名

県内の障害のある幼児とその保護者、学級で不適応を起こしている幼児児童生徒とその保護者を対象とした、電話相談や来所相談を行う。

3 「訪問相談」 ※令和元年度支援ケース数:12名 学校園訪問 3校園

県内の様々な課題を抱える幼児児童生徒とその学校園の依頼に応じて、学校経営アドバイザー(附属小学校スタッフ)と特別支援教育コーディネーター(附属特別支援学校スタッフ)の2名、を原則とし、必要に応じて大学のスタッフを加えて学校園を訪問する。

- ※ 必要に応じて諸検査を実施、保護者、担任との面談を行った。

4 「研修支援」

県内の教育関係者を対象とした、公開研究会の開催や、研修講師の派遣、検査器具の貸し出し等のそれぞれのニーズに応じた研修の機会を提供する。

- ※ 令和元年度事例検討型ワークショップ2回(公開)に教育関係者等のべ26人が参加
- ※ 渋川市内中学校にてUDLについての授業参観、校内研修に講師として1名ずつ2回にわたり派遣した。

5 個別・グループ・集団指導 (年間10回開催)

県内の小・中学校に在籍する特別な配慮を必要とする児童生徒とその保護者を対象に、指導、支援を行う。また、そこで見られた児童生徒の様子を基に、センター・在籍校・保護者の三者が在籍校や家庭でのよりよい支援について検討していく。

- ※ 中間報告・事後報告として、在籍校を訪問した。

6 諸検査の実施 ※令和元年度支援ケース数:1名

県内の様々な課題を抱える幼児児童生徒の保護者からの要望に対して、諸検査等によるアセスメントと、エビデンスを基にした対応を検討していく。

7 「心のバリアフリー推進事業」

附属4校園の研究を進める際の調整役を担った。附属4校園が協働して、図画工作科、美術科を中心に、附属4校園及び地域の小学校(居住地校交流)、近隣の高等学校で交流及び共同学習の授業実践を行い、教科をとおした障害者理解について研究を進めた。

- ※ 附属幼稚園と3回、附属小学校と3回、附属中学校と1回、特別支援学校小学部児童による居住地校交流2回、近隣の高等学校と1回、特別支援学校との交流及び共同学習を行った。

● 報 告

附属小学校における取組 ～提案授業・授業研究会～

学部・附属学校共同研究センター長 吉田 秀文

今年度も附属小学校では、各教科等部の研究方向に沿った提案授業を公開し、研究の妥当性・有効性について検証した。提案授業や紀要作成では学部教員が研究協力者として関わり、実践後は参観者と共に研究の具体化や深化に向けて様々な議論を行った。これは附属小学校教員一人一人の授業力向上に資するものとなった(表)。

また、今年度は数理データ科学教育研究センター等のご指導の下、全9回のプログラミング教育実践授業・授業研究会が開催され、各学年の発達に応じたプログラミング的思考の育成の在り方について検討された。

〈提案授業 参加者一覧〉

〈教科〉 日 時 学 年 テーマ	授 業 者	研究協力者
〈家庭科〉 令和元年11月 5日(火)13:25～14:10 第5学年 「自分の体に合ったエプロンをつくろう」	中 里 真 一	家政教育講座 小林 陽子 先生
〈社会科〉 令和元年11月11日(月)10:55～11:40 第3学年 「はん売のしごと」	佐 藤 真 樹	社会科教育講座 宮崎 沙織 先生
〈生活科〉 令和元年11月11日(月)14:00～14:45 第1学年 「みつけた あきで あそぼう」	芹 澤 嘉 彦	教職リーダー講座 大島 みずき 先生
〈英語科〉 令和元年11月18日(月)10:55～11:40 第6学年 「Boom in Japan ～日本の流行を紹介しよう～」	高 橋 洋 介	英語教育講座 上原 景子 先生
〈理 科〉 令和元年11月18日(月)14:00～14:45 第5学年 「強力な電磁カクレーンをつくろう」	井 上 俊 介	理科教育講座 益田 裕 充 先生
〈国語科〉 令和2年 1月20日(月)10:55～11:40 第3学年 「書き方のよさを見つけよう」(「ありの行列」他)	桐 生 直 也	国語教育講座 濱田 秀行 先生
〈算数科〉 令和2年 1月20日(月)14:00～14:45 第2学年 「分数」	根 岸 徹	数学教育講座 澤田 麻衣子 先生
〈体育科〉 令和2年 1月 31日(金)10:55～11:40 第5学年「バウンドテニス」	栗 原 和 馬	保健体育講座 鬼澤 陽子 先生
〈音楽科〉 令和2年 1月 31日(金)14:00～14:45 第5学年 「思いを表現に生かそう」	稲 森 稚 明	音楽教育講座 中里 南子 先生
〈道徳科〉 令和2年 2月 7日(金)10:55～11:40 第1学年 「うつくしい ところ」(感動, 畏敬の念)	内 田 圭 祐	教職リーダー講座 山崎 雄介 先生
〈図画工作科〉 令和2年 2月 7日(金)14:00～14:45 第6学年 「学芸員になったら」	豊 岡 大 画	美術教育講座 郡司 明子 先生

※提案授業後16:15～18:00に授業研究会が行われた。



〈プログラミング教育実践授業〉 算数5年「多角形と円」の授業実践から

● 報 告

現職教員の成長を促す温かな学び合いの場

教育実習・実践開発部門 安藤 哲也

「現代的学校教育の課題解決シリーズ2019」の「学び合う仲間による教員研修リレー講座」が次の日程・内容で行われました。延べ参加人数は36名でした。今年度も教員一人一人の問題意識に支えられた、温かいつながりのある学び合いができました。大学の先生方の理論知を積極的に自分の実践知に取り入れようと真剣に耳を傾けているまなざしの中に、学び続ける教師像の本質を見取ることができました。そのような真摯な姿勢で参加された先生方に、改めて御礼申し上げます。

2019 現代的学校教育の課題解決シリーズ日程

学び合う仲間による教員研修リレー講座

講座日	担当/所属/専門分野	内 容
第1回講座 5月18日	〈常葉大学〉 堀井 啓 幸 教授/教育経営	2030年の学校教育をみすえた学校と学びを考える
第2回講座 5月25日	〈群馬大学〉 岩 瀧 大 樹 准教授/臨床心理学	学校教育相談に活かす認知行動療法のエッセンスⅢ ーメンタルヘルスの理解とセルフケアの支援に向けてー
第3回講座 6月15日	〈群馬大学〉 安 藤 哲 也 教 授/生活科・教育実践	子どもの学びをつなぐ幼小接続
第4回講座 6月29日	〈東京学芸大学〉 佐々木 幸 寿 教 授/教育行政学	学校における教育法規の活用 ー弁護士への対応と活用ー
第5回講座 7月 6日	〈群馬大学〉 吉 田 浩 之 教 授/生徒指導	いじめ対応に関する組織的取組の最新動向
第6回講座 7月20日	〈富山大学〉 笹 田 茂 樹 教 授/教育行政学	教員の働き方改革と「チーム学校」
第7回講座 10月19日	〈玉川大学〉 久保田 善 彦 教 授/理科教育	学びが深まるICT ー活用形態から授業改善を検討するー
第8回講座 10月26日	〈群馬大学〉 霜 田 浩 信 教 授/障害児心理学	発達障害児の理解と支援

(各回とも13:30~15:00の開催)

■各講座に参加した先生方の感想

- 自分なりの課題をもって参加させて頂きました。いくつかやってみたくと思うものを教えて頂き、ありがたかったです(特にコピーングについて)。
- 現場で管理職をしていますが、実際の法規について勉強する機会がなく、とてもよい学習となりました。
- タイミングよく、現在抱える問題に対するヒントや対応策が頂けました。
- 1年に1回でも聞けると、また思い出して、気を付けようと思います。勉強になりました。
- 群大ではあまり扱っていないテーマであったため、大変刺激的で勉強になりました。参加されていた先生方も、問題意識がはっきりとされていた方々ばかりで貴重なお話を聞くことができました。
- ICTの指定研修などでは、とかく機器を使うことが目的化してしまうが、教材ー子どもー目標が大前提であることが実感できた。この短時間の中でグループワークまで取り入れて頂き、ありがとうございました。
- とても分かりやすく具体的なお話をお聞きでき、勉強になりました。もっとほかにもいろいろお聞きしたいと思いました。アンテナを高くして受講できる機会を得たいと思います。
- 少人数の研修にもかかわらず、先生の熱意ある話は分かりやすく、ためになりました。明日からの仕事に大いにエネルギーをもらった気分です。
- 私は退職した者ですが、相談員をしています。以前、知り合いが受講したのを思い出し、申し込みました。とても良い刺激になりました。
- 子どもの実態により適切な指導は変わってくるため、さまざまな地域や状況の異なる先生方の指導方法などの意見を知ることができるとよいと思いました。

どの講座の感想からも、教員個々人が学び合い、自己を冷静に認識・理解するための自己省察の営みが窺えました。今日の厳しい教員社会を乗り越えるには、教員個々人が「今の言説」に惑わされないための柔らかな眼(知)をもつことが必要です。現在の学校教育に対する自身の問題意識を大切にして、一緒に学び合い高め合いながら、私たちを取り巻く厳しい教育現実の状況を乗り越えていけたら幸せです。現場の教員が大学に足を運んで、共に学び合い高まり合うことの大切さを確認する場として、学校教育臨床総合センターのリレー講座があります。



● 報 告

教育臨床事例検討会 2019年度の取り組み ～学びの全国への更なる発信に向けて～

教育臨床心理部門 岩 瀧 大 樹

9年目の取り組みとなる教育臨床事例検討会は、今年度も平日の遅い時間帯でのスタートにも関わらず、中毛だけではなく、北毛・東毛・西毛からもメンバーの先生が駆けつけてくださいました。さまざまな事例をもとに、毎回有意義なスクールカウンセリングに関するディスカッションを行うことができました。特に今年は、スクールカウンセラーと教員との連携について、事例を踏まえつつ、具体的な取り組みとして「何ができるか」、「どう協働するか」という点で議論ができたように感じます。各回の概要は以下になります。

2019年度の教育臨床事例検討会の活動

回	実施日	時 間	事例提供者	事 例	参加者
1	2019年 5月28日 (火)	19:30～21:00	参加メンバーによるグループワーク	2019年度の学校教育相談を展望する	8名
2	2019年 6月25日 (火)	19:30～21:00	県内公立機関カウンセラー	公立相談機関における教育相談実践事例	5名
3	2019年 7月23日 (火)	16:00～17:30	県内公立学校教諭	衝動性の問題を抱える男児児童に対する教育相談的事例研究 —校内リソースを活用したタイムアウト法を中心に—	8名
4	2019年 9月24日 (火)	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	学校教育相談実践事例	8名
5	2019年 10月29日 (火)	19:30～21:00	参加メンバーによるグループワーク	スクールカウンセリングにおける課題をふり返る	7名
6	2019年 11月26日 (火)	19:30～21:00	県内公立学校スクールカウンセラー	「いじめ問題」について考える	9名
7	2020年 1月28日 (火)			荒天のため延期	
8	2020年 2月25日 (火)	19:30～21:00	県立公立学校スクールカウンセラー	小学5年生男子児童への支援 —教員チームによる特別支援教育の観点から—	8名
9	2020年 3月24日 (火)	19:30～21:00	参加メンバーによるグループワーク	2019年度の学校教育相談を振り返る	—

また昨年度に引き続き、今年度も2019年8月9日(金)～11日(日)に宮城県仙台市の東北福祉大学にて開催された日本学校教育相談学会第31回(宮城大会)にて、メンバーの先生が本事例検討会でご提案くださった実践をブラッシュアップし、ご発表されました。発表の開始時刻前から多くの方々がお越しになるとともに、終了時刻を過ぎても、熱心な学会参加者の方々よりたくさんのご質問・ご意見を頂き、大変盛況なポスター発表となりました。本事例検討会での学びが、群馬県を越え、全国の多くの教員、スクールカウンセラーなどの心理職の皆様と切磋琢磨する機会につながりました。



「日本学校教育相談学会 ポスター発表に参加して」 県内公立学校教諭 上井 勇一先生

宮城大会でのポスター発表を振り返って、理論と実践の結びつきを実感しました。まず、発表の準備を通していく中で、数ある指導のひとつに終わることなく、確かな経験値として頭の中に残していくことができました。また、普段の指導の中にはさまざまな心理学の理論が背景にあること、反対に様々な理論をどのように指導へ取り入れていくのかを学ぶことにつながりました。この度の貴重な成長の機会を与えてくださった岩瀧先生、支えてくださった全ての方へ改めて感謝申し上げます。

● 報 告

体験的科目における ボランティア養成セミナーへの参加

教育臨床心理部門 岩 瀧 大 樹

今年度は、教育臨床心理部門が担当する科目「ネイチャー・カウンセリング」の受講者63名、「コミュニティ・サービス・ラーニング」の受講者のうち希望者33名、および教育学部有志2名の合計98名の2年生が、国立赤城青少年交流の家のご支援・ご指導を頂きつつ、6月22日(土)～23日(日)に1泊2日の「ボランティア養成セミナー」に参加し、13時間のカリキュラムを受講しました。人間関係づくりの演習には、現在群馬県内の学校で活躍されているOBも駆けつけてくださり、先輩として様々なアドバイスを伝えてくれました。荒牧キャンパスではなかなかできない深い体験ができました。また、救命講習においては、前橋市消防局白川分署の皆様にも多大なご協力を頂きました。

参加者たちはこの体験をもとに、2019年6月から2020年1月まで、各自が地域の子どもたちと触れ合い、更なる研鑽を積み重ねました。貴重な体験が、今後出会う子どもたちへの実践的なサポートにつながることを期待しています。



「群大生へのメッセージ」 国立赤城青少年交流の家 福岡 公平 事業推進係長

群馬大学の学生の皆さんには、多くの事業に携わっていただきました。印象的だった姿が2つあります。ひとつは、あるゲストのパフォーマンス中、会場を盛り上げてくれた男子学生の姿。もうひとつは、キャンプの帰り際、参加者の子供が、バスから女子学生の名前を叫びながら、いつまでも手を振っていた姿です。ボランティア事業に携わるにあたり、大切にしてほしいのは、①誰よりも楽しむこと、②参加者に寄り添うこと、③素敵でカッコいいお兄さん、お姉さんであること、が体现されていました。この2つの様子以外でも、皆さんとても頼もしかったです。また、一緒に子供たちの笑顔をつくりましょう!!

「ボランティア養成セミナーに参加して」 教育学部保健体育専攻 2年 松本 大輝さん

ボランティア養成セミナーの6月合宿では、グループリーダーと全体のリーダーを担当しました。話し合いの進行をする場面が多かったですが、その中で自分の意見を出すだけでなく、他の人のことも考えての発言が大切だと改めて感じました。人間関係づくりの演習や野外体験では、楽しみつつ、関わりのなかった人たちと協力したり、触れ合ったり、普段の生活では絶対にできないようなことがすんなりとできました。何かをやる遂げることで達成感やメンバーとの関係の深まりが味わえました。サバイバルスキルもある程度習得できたと思います。

また、今までよりも長い救命講習でしたが、最も具体的かつ実践的に学ぶことができました。協力すること、そしてリーダーとして必要なことなど、多くの学びのあった合宿でした。

● 報 告

群馬県立自然史博物館と筑波大学との協働 ～地域の子どもたちとの味噌づくり～

教育臨床心理部門 岩 瀧 大 樹

教育臨床心理部門担当の体験的科目では、毎年国立赤城青少年交流の家が秋に主催するイベントのお手伝いをさせて頂き、様々なブースを作成して地域の子どもたちと交流しております。今年は、ブース設営に際し、「地域の素材を活用できないか」という点にねらいを向けました。そのプロセスで、群馬県立自然史博物館の姉崎智子学芸員、筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所の出川洋介先生とお目にかかることができ、助言を頂きながら、「手前味噌をつくろう!」というブースに挑戦いたしました。国内産大豆の準備には直営店の皆様、麴の準備には長年前橋市内で味噌を作られている須田商店様にお力添えを頂き、11月3日(日)～4日(祝)の「赤城フェスタ2019」にて、約40名の群馬大学生と2名の筑波大学院生が中心となり、2歳から12歳までの子どもたちとその保護者の皆様の約120名と「手前味噌づくり」を体験しました。

保護者の皆様からのアンケートでは、「子どもと一緒に良い経験ができました。発酵の1年後が楽しみです」、「お味噌汁の味噌が案外簡単に作れて親子で楽しめました。全国の味噌地図の試食も面白かったです」、「親子で原材料について話し、顕微鏡で麹菌も見られ、勉強になりました」、「学生の皆さんが子どもたち目線で接してくださったので、子どもが喜んでいました」などのお言葉を頂くことができました。

またその取り組みは、2020年1月11日(土)に群馬県立自然史博物館主催のイベント“ぐんまの自然の「いま」を伝える”におけるポスター発表で、県内のみならず全国の高校生からベテランの研究者・実践者に報告されました。多くの皆様と協働し、そして楽しみながら学びを共有する体験にすることができました。



「群馬大学の皆さんへ」 筑波大学山岳科学センター 菅平高原実験所 所長 出川 洋介先生

地域の子どもたちとの“手前味噌づくり”、楽しかったですね。元気よく朗らかに子どもたちに接する皆さんを拝見して、さすが先生の卵!と感心しました。菌はとかく嫌われがちですが、実は役にも立つということを、楽しかった味噌づくり体験を通して子ども達も親御さん達も理解してくれたと思います。皆さんのおかげです!有難うございました。

「群馬大学の皆さんへ」 筑波大学教育研究科教科教育専攻理科教育コース 修士2年 小島 司さん

先日の“手前味噌づくり”では大変お世話になりました。私自身、皆さんのまっすぐな姿勢には学ぶところがありました。今回の“手前味噌づくり”のように、普段見逃しがちでも、ふと寄り道してみると「おもしろいこと」がたくさんあると思います。ふらりふらりと寄り道しながら、たくさん「おもしろいこと」を見つけ、それを楽しそうに子どもたちへ伝えていく、皆さんがそんな「おもしろい先生」になることを期待しています。

● 報 告

「群馬大学教育実践研究37号」発行のお知らせ

紀要編集委員長 三 國 正 樹

群馬大学教育実践研究は、今年もCDに保存した電子データでの配布となりました。紙媒体のよいところは、机の上に置いておくだけで、冊子の内容が、表紙の執筆者・題目一覧等から見えてくるところです。ただCDに保存し配布した場合には、その表紙すら人目に付かないということも生じてきます。そこで、このニュースレターのお場をお借りして、37号の題目ならびに代表執筆者の一覧を掲示いたします。これと思った論文がありましたら、配布しましたCDまたは大学HPを開いて関心のある論文を読んでいただけたら幸いです。

国語の授業で注意すべき言葉 — 「仕手」、「受け手」をめぐって—	小林英樹	1
グループ学習の有効性と教師による課題設定 — 児童生徒アンケートと授業観察に基づく分析—	峯川浩一・斎藤周	5
中等地理教育で中心市街地のあり方を考えるための地域学習単元開発 — 歴史地理学との共同開発の試み—	宮崎沙織・関戸明子・今井貴秀	15
群馬大学教育学部の海外日本人学校におけるインターンシップ		
..... 伊藤隆・新井淑弘・前田亜紀子・青木悠樹・狩野未来・藤本旺輝・板倉菜美子		33
任意単位の設定を重視した小学校第4学年「面積」の学習指導に関する事例的研究「知識の調整」プロセスの具体化を意図して	植松敬太・小泉健輔	43
ジグソー学習を取り入れた数学の授業の一考察	小久保 練	53
理数探究における問題解決過程に関する一考察	篠塚拓也	61
理科授業における解決方法の立案に関する研究 — 自然現象の提示から予想・仮説の設定と検証計画の立案の局面の関係に着目して—	益田裕充・山内宗治・鈴木 駿・半田良廣	71
「群馬大学教育学部理科専攻 観察・実験支援ボランティア事業 (通称わかぼら)」における学生の学びについて		
..... 佐野(熊谷) 史・中村宏基・大熊信彦・佐藤三枝子・高橋 学・林 和弘・小野智信・大谷龍二		79
単元の導入で観察した現象の変化をグラフに表現させる指導が疑問の生成に及ぼす効果	栗原淳一・畔上峻也・高柳智之	87
音楽科教育におけるUDL概念からの示唆と考察 — 教員養成における授業実践を通して—	吉田秀文	93
音楽鑑賞教室の定着による特別支援学校児童生徒の変容	菅生千穂・山田茅穂	101
インクルーシブアート教育の広がり可能性 — 障害のある子どもが災害と向き合うためのアート教育実践—	梶原千恵・竹丸草子・茂木一司	111
図画工作科における児童の「つまづき」について — 児童へのアンケート調査から—	貞永 瞳・齋江貴志	121
子どものアートの身体／思考を促す造形活動の考察 — BFAプロジェクトの実践を通じて—	宮川紗織・郡司明子・石原加奈子・梶原千恵・狩野未来	131
大学ダンス授業における鏡の利用が動作習得に関する自己評価に及ぼす影響	菅家沙由梨・河野 由・金子伊樹・新井淑弘・浅井泰詞	141
マインドフルネスを用いたメンタルトレーニングが女子大学生アスリートの身体組成、心理面、および生活習慣に与える影響		
..... 陸上長距離選手を対象として—	高橋珠実・新井淑弘	149
小学校1年生を対象にした投運動学習に関する研究：用具としての楕円ボールがこどもの投運動に与える影響	小山啓太・山西哲郎・木山慶子	155
中学校武道領域における空手道授業に関する研究 — 教員養成課程の模擬授業の検討を通して—	田井健太郎・神野周太郎・元嶋菜美香・宮良 俊行・島 孟留・末次美樹・麓 正樹・今村裕行	163
校外学習を効果的に活用する小学校プログラミング教育の実践	小熊良一・松下七彩・岩崎綾乃・境野結美・芳賀由梨	171
2011年タイ洪水時の居住者の対応と防災教育 — バンコク、アユタヤを事例として—	田中麻里	179
教育学部GFL育成プログラムの現状と今後の課題 2018年度のアンケート結果分析を踏まえて	山田敏幸・鈴木 豪	185
知的障害者施設での聾重複障害者へのコミュニケーション支援におけるかかわり	橋本朱音・甲斐更紗・吉村京子・二神麗子・木村素子・金澤貴之	195
計算に困難を抱える児童への課題分析を用いた指導方法の検討	佐藤啓子・霜田浩信	205
韓国における巡回教育の現状と課題	金 旻慶・任 龍在	217
群馬大学教職大学院における小中学校教員の成長 — 学校長との面接に基づく検討—	佐藤浩一・新藤 慶	225
群馬大学教職大学院修士生の「教員としての資質」の現状と課題 — 教員育成指標をふまえた勤務校管理職への調査に基づいて—	新藤 慶・佐藤浩一・田村 充	239
教職大学院における学修を促進する要因の検討 — 12年間の実践と成果検証を踏まえて—	山口陽弘・佐藤浩一・新藤 慶・山崎雄介	255
思考ツールを生かして文章を書く力を育てる中学校国語科の授業	吉田和樹・佐藤浩一・田村 充	267
ピア・サポートマネジメントの検討	懸川武史	277
教職大学院「課題研究」を通じた学校改善 — 2008～2018年度の実践を振り返って—	山崎雄介・木村淳一	287
学級経営の充実に向けた特別活動の指導法に関する基礎的検討 — 対話型アプローチとグループワークを取り入れた授業実践例—	音山若穂・坂西秀昭・須藤宣之・懸川武史	297
教員同士の「つながり」の深化を通じた学力向上の実践	山崎恵子・高橋 望	307
小学校への期待と小学校生活の満足度への幼稚園の園舎環境・きょうだいの影響	大島みずき	317
交流及び共同学習の評価についての一考察 — 図画工作科の実践を基に—	豊岡大画	325
新任期教師の視座からの関連的な指導の意義に関する事例的考察 — 生活科を中核とした授業実践と語りを通して—	安藤哲也	335

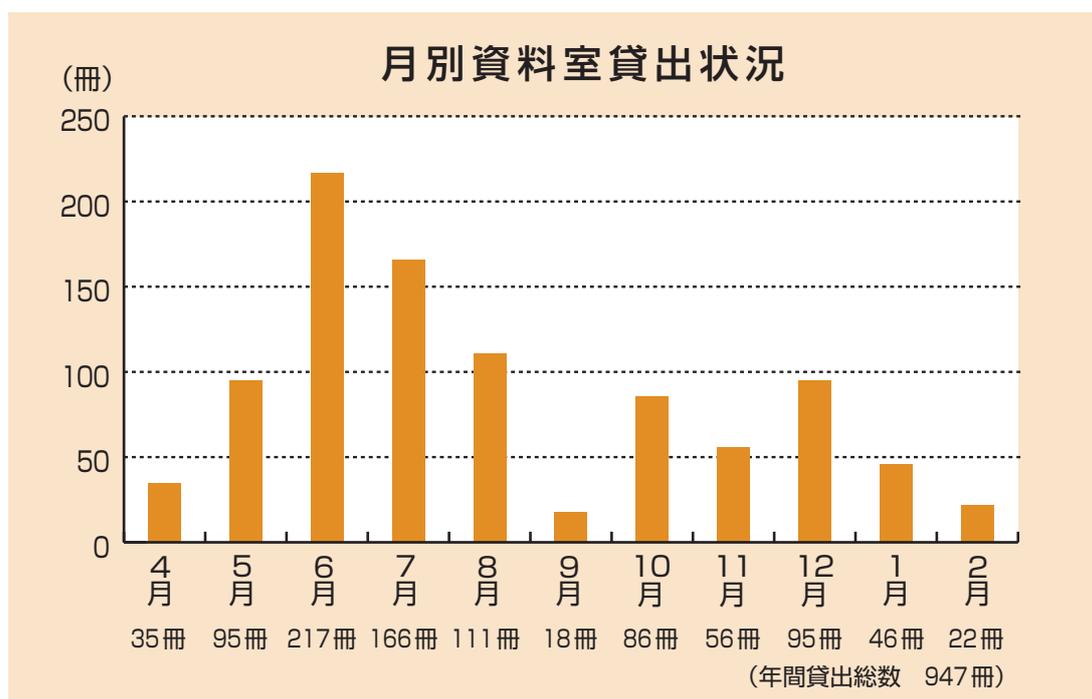
● 報 告

資料室利用状況

教育実習・実践開発部門 安藤 哲也

■ センター資料室の利用状況

本センターでは、県内小中学校で使用されている教科書・教師用指導書などを整えています。今年度の貸出数は、年間で1000冊に迫る貸出がありました。授業実践に向けた事前準備の学習を着々と進めていた様子が読み取れます。



■ 教育実習校別の学習指導案プール状況

本センターでは、学生が教育実習で作成した学習指導案等を実習校毎に保管しています。各市町村教育委員会管内の学習指導案数は、学生が指導案に事前に目を通していくことも重要です。前橋市 (69校)、高崎市 (73校)、桐生市 (23校)、伊勢崎市 (22校)、太田市 (35校)、沼田市 (18校)、館林市 (18校)、渋川市 (21校)、藤岡市 (10校)、富岡市 (15校)、安中市 (16校)、みどり市 (10校)、榛東村 (3校)、吉岡町 (3校)、甘楽町 (2校)、中之条町 (1校)、玉村町 (7校) で、小学校224校、中学校122校、計346校の指導案が保管されています。

群馬大学教育学部 附属学校教育臨床総合センターニュース第8号

発行日：令和2 (2020) 年3月

発行所：国立大学法人群馬大学教育学部附属学校教育臨床総合センター

〒371-8510 前橋市荒牧町四丁目2番地 TEL 027-220-7385 FAX 027-220-7381

URL <http://center.edu.gunma-u.ac.jp>